心ふれあう おかやまのちょっといい話 シリーズ②

※チラシは偶数月の第一月曜日に皆様におとどけしています。

「嫁ぐ娘へ、手紙に込めた想い」

娘を返す日がとうとう来ました。

会わせたい人がいると言って職場の同僚を連れてきました。口数は少ないですが、実直そうな青年でした。

娘も29歳になりましたから、もうそろそろ結婚と思ってはいましたが、いざとなると父親の心境というのもなんとも複雑なものです。

29年前の12月、岡山に珍しく雪が降った日でした。予定日より早く陣痛が始まり、職場を早退して病院に駆けつけたのを思い出します。

家内と一緒に娘が生まれてきてから内緒で書き溜めてきた手紙があります。思いついたとき、節目節目で書きためた娘宛の手紙。

生まれたとき、初めて立ったとき、小学校に入学など、本人も覚えていないこともたくさん書いてあります。また、反抗期の親心を綴った記憶もあります。その時々で封をして開けていませんから、私自身も覚えていないことも、もっとたくさん書いてあるでしょう。

結婚が決まったら渡そうと言って、もう何十通にもなってしまいましたが結納の前には、娘へ渡そうと家内と話をしました。

娘が生まれたとき、私の父親から言われたことがあります。**「女の子というのは、預かり物だ。いつか嫁に行く。それまで、旦那になる人の家から娘を預かっていると思って大事に育てないといかんよ。いつか返す日が来るんだから。」**と言われたことを思い出します。

預かった娘だと思って育ててきたつもりでしたが、いざ嫁に行くと思うと寂しさがつのります。

娘には自分だけでなく、彼と一緒に手紙を読んで欲しいと思っています。

そうして彼にもっと娘のことを知ってもらえれば、娘の人生ごと託すという引き継ぎもでき、もっと娘を大事にしてくれるものと信じています。

最後の「結婚おめでとう」の手紙は書き終えるのに今までで一番時間がかかってしまいました。

そして迎えた結納の日。想いを込めて娘に手紙を渡しました。娘は驚いていましたが訳を話すと、目に涙をためて喜んでくれました。

しかし、本当に驚いたのはその後でした。

予想もしていませんでしたが、娘婿から手紙を渡されたのです。

口下手なので、手紙で結婚への決意を書いてきたとの事でした。思いがけず、想いが通った瞬間に、いい息子ができそうだと感激しました。久しぶりに美味しいお酒を新しい家族と酌み交わした忘れられない一日になりました。

『父親になることは難しくないが、父親であることは極めて難しい』　ヴィルヘルム・ブッシュ

父親の役目、父親であるということがどういうことか、それぞれに答えがあると思います。同様に、母であること、大人であること、立場立場で自分自身どうあるべきなのか、考えてみることも時には必要かもしれませんね。

あなたの町のアーバンホール
葬儀・法要・ギフト　アーバンホール